

# 畜産の里づくりを目指して

## 農業粗生産額の33% 県内一の家畜飼養頭数

本市は、米とともに畜産の生産額も県内一を誇ります。肉用牛、乳用牛、豚を中心とした畜産の粗生産額は、農業全体の33%を占めています。

また、家畜飼養頭数も県内一位。中でも肉用牛は繁殖牛が7,498頭、肥育牛15,621頭が飼育され、年間出荷頭数は子牛と和牛肥育牛がそれぞれ5千頭を数え、全国でも上位の出荷頭数となっています。

子牛と肉牛の出荷頭数に差がないということは、肥育素牛を市内から調達する地域一貫生産が定着しているように思われますが、血統の組み合わせや市場性などから、肥育素牛

を県外に求めることが多く、調達率は40%にしかなっていません。今後、ブランド化と安心安全な牛肉の生産を目指し、地域一貫生産の普及が望まれています。

### 放牧形式で労力を省力化 1年1産を実現する

経営に工夫を凝らし、合理的な飼育管理で労力の省力化や低コスト生産を実現しているのが、迫町の新田尚さんと登米町の千葉正憲さんです。新田さんは、自宅に隣接する60坪の土地で、電気牧柵びんせうぼくさくによる繁殖牛の放牧飼育をしています。現在、親牛40頭を飼育し、年間30頭を超える子牛を出荷しています。

「放牧飼育には利点が多くありま



新田 尚ひしさん (53歳)  
迫町・大形

す。畜舎飼育と比べると、排せつ物の搬出作業が2カ月に1回と少ない回数で済み、その労力を別な作業に注げます」と語ります。

親牛が子牛を産む周期は1年1産が望ましいのですが、現実的には非常に難しいことです。しかし、放牧することで牛の健康状態が良くなることと、観察する時間が取れることで発情期を見逃さず、1年1産を可能にしています。

「1人の労力には限界があるため、増頭するには省力化が必要だった。放牧形式にしたことで効率良く作業

ができ、健康で元気の良い牛が育つてくれている」と新田さんは話します。

今後市では、放牧形態の繁殖経営も推進していく考えています。

### 市内産の子牛を導入 地域一貫生産を実現

(有)千葉仁畜産で取締役を務める千葉さんは、畜舎4力所で450頭を肥育し、年間250頭の黒毛和牛を出荷しています。

経営の特徴は、肥育素牛をすべて宮城総合家畜市場で市内産だけを導入していることです。このことは市内での地域一貫生産を実践していることとなります。

畜舎は、牛の体調維持のため通気や採光を考えた設計にしています。餌は自動給餌装置により、朝晩2回、決められた時間に配合飼料を与え、排せつ物はそれぞれの牛房から自動的に押し出されて一定量になってから運搬機で搬出しています。一連の作業を機械化することで、新田さん同様、労力を省力化し、牛の体調や発育度合いなど、衛生・個体管理に



千葉 正憲まさのりさん (50歳)  
登米町・岡谷地



餌を与えるときも一頭一頭の食べ方で  
牛の体調や発情期などを観察します



自動給餌装置を使うことで労力を省力化

十分な時間を充てています。  
千葉さんは「良い子牛は良い成牛  
に育つ。今後も市内産の良質な子牛  
を導入し、手塩にかけて飼育してい  
く。そしてすべて仙台牛として出荷  
していきたい」と語ります。  
本市はブランド牛を生産する畜産  
の里です。生産者の経営努力が続き  
ます。